

《研究ノート》

帝国主義と第三世界の「工業化」(2)

嶋 田 巧

目次

はじめに

I B. サトクリフの見解の紹介と検討

——論文「帝国主義と第三世界の工業化」に即して——

II 問題の整理

——現代帝国主義(論)への接近という問題関心から——

1. 帝国主義概念をめぐる(以上『同志社商学』第33巻第6号)
2. 帝国主義と第三世界の「工業化」
3. 第三世界が直面している諸問題の性格
むすびにかえて(以上本号)

2 帝国主義と第三世界の工業化

すでにB. サトクリフやB. ウォーレンらの主張が基本的には広義の帝国主義概念に立脚していることは明らかにした。また両者の主張がきわめて対照的であるにもかかわらず、ある意味で——両極の裏返しにされた形ではあるが——共通性が存在していることを示唆しておいた。ここでは従属派とそれに反対するB. ウォーレンらの第三世界の「工業化」をめぐる評価を明確にすることで、この点をより鮮明にしよう。

(1) 従属派の評価

まず最初にB. サトクリフらの従属派も第三世界における「工業化」あるいは経済成長そのものを必ずしも全面的に否定しているわけではないことを確認しておこう。¹

1 ただし以前においては“停滞論的”論調がより濃厚であったように思われる。例えば、B. ウォーレンによれば、B. サトクリフのかつての見解は、第三世界の「工

B. サトクリフと B. ウォーレンの論争をとりあげている A. プレワーも、「第三世界においてかなりの工業的発展が近年生じたことは一般に同意されている²」と述べている。問題は帝国主義との関連で第三世界の現在の「工業化」の進展をどのように評価するかである。「第三世界における工業的成長は明らかに問題ではない。問題はむしろこの工業的成長の性格である。それが国際的な資本主義的発展について何を現わしているかであり、(世界的規模での)資本蓄積の過程における固有の諸矛盾である³」。

まず従属派による第三世界の「工業化」に対するアプローチの姿勢ないしは分析視角から検討しよう。B. サトクリフについてはすでに明らかにしたように、第三世界における「工業化」の現実⁴は理念化された自立的国民経済像と対比され裁断された。そこから容易に「自立的」工業化の否定が結論された。ここではあらためてこうした理念的アプローチとでもいうべき姿勢がより鮮明である A. エマヌエルの論文「発展の神話対低開発の神話⁴」をとりあげることによりその問題点を浮彫りにしよう。彼は B. ウォーレンの論文の重要性といくつかのメリットを認めながら「議論の基本線は誤まっている⁵」としつつ、その最大の難点を「工業化」と「発展」の同一視すなわち「工業化に対する物神崇拜⁶」に求めている。A. エマヌエルは言う。「発展が工業化を意味するという仮定に基づいて彼 (B. ウォーレンのこと——筆者) は、工業化 (実際にはまさに「製造業化」と発展が一つの同じものであるという保証のない結論に飛躍する。同じデータがウォーレンと私を二つの反対方向に導びくということになる……単なる工業化それ自体は発展のよいものさしではない⁷」と。このように「発展」と「工業化」

「工業化」そのものに対して否定的なものであった。本稿でとりあげた彼の「自立的」工業化否定論は「第三世界にとって工業化は不可能ないしはほとんどあり得ないという以前の予言と著しく異なっている」(B. Warren, *Imperialism and Capitalist Industrialization*, *New Left Review*, Sep.-Oct. 1973, p. 17)。なお特に注記していない場合 B. ウォーレンの議論はすべてこの論文からの引用である。

- 2 A. Brewer, *Marxist Theories of Imperialism: A Critical Survey*, 1980, Routledge & Kegan Paul, p. 283.
- 3 P. McMichael, J. Petras & R. Rhodes, *Imperialism and the Contradictions of Development*, *New Left Review*, May-June, 1974, p. 84.
- 4 A. Emmanuel, *Myths of Development versus Myths of Underdevelopment*, *New Left Review*, May-June, 1974.
- 5 *Ibid.*, p. 61.
- 6 *Ibid.*, p. 63.
- 7 *Ibid.*

の相進を強調する A. エマヌエルにとって「発展」とは一体何であろうか。それは端的に言えば人間の物質的福祉の増進である。「もし我々が経済発展の概念の解明を真に望むならば——最も主要なものとして——次の事を承認しなければならない。発展の唯一の想像しうる目的は人間の物質的福祉を改善することである。発展はこの理由においてのみ経済学者の関心のまとなる。工業化、製造業化、機械化等はこの目標を達成する手段でありうるだけである。それ自体を目標とみなすことはばかげたことであり途方もないことであろう⁸」。このように「工業化」と区別して「経済発展」の内容を規定する A. エマヌエルにとって問題は次のように設定される。「我々が発見しようとしているのは第三世界の将来の発展が資本主義的道に沿って（ウォーレンの非常に強い定式によれば帝国主義は“自己破壊的”である）可能であるのか、あるいはこの道は事実上閉ざされているのかという事である⁹」。

こうしたアプローチの下で、また現代の資本主義との直接的対比を念頭におきながら——この点もまたその理念的アプローチを示すものであろう——第三世界における「工業化」が以下のように特徴づけられている。まず第1はその「工業化」が物質的福祉の改善を意味しないことである。「発展」一般ではなく「資本主義的發展」に関心は集中しているとされ、「その最も信頼できる直接的指標¹⁰」、生産諸力の発展の真の指標¹¹として人口一人あたり GNP が重視される。そしてこの点からすれば「第三世界の状況は輝やかしいものとはとうていいえない¹²」。第2は、第三世界における「工業化」の内実が前資本主義的手工業を多く含む点である。「ウォーレンは“製造業”が手工業を含むことを見過したか、そうでなければ後者が相対的に無視しうるものと考¹³えた」、実際には製造業のうち半分だけが工業的 industrial であり、残りの半分は前資本主義的手工業である。第3は農業の生産性の低さにより農業内部にとどまったものが、農業を離れた者を養うことができない現実である。ここから「工業化は発展のための構造的条件ではなくその症候群である¹⁴」とみなされ、「発展が前提するものは

8 *Ibid.*, p. 64.

9 *Ibid.*, p. 71.

10 *Ibid.*, p. 64.

11 *Ibid.*, p. 71.

12 *Ibid.* (これは、B. ウォーレンが総成長を問題にしたことへの反論であり、1951—69年において低開発諸国の総生産の成長率が先進諸国のそれを上回っているとデータの対する評価である)。

13 *Ibid.*, p. 67.

14 *Ibid.*, p. 69.

工業化ではなく、まず何よりも農業における生産性の増大である¹⁵と結論される。

P. マクミハエル¹⁶も同様のアプローチに基づいて第三世界における「工業化」の否定的現実を「従属的成長」として概括している。主要な点は次のように整理されるであろう。まず第1は大部分の諸国にとって経済の植民地的性格が圧倒的である。例えばそれは輸出の81パーセントが原料、食料、燃料であることに示される。「開発諸国と比較して低開発諸国が停滞的であることは明白である」¹⁷。第2は、その「発展」の根本的問題として雇用に固有の限界をもつ「不均等な性格」である。すなわち、「西欧における資本主義的發展で生じた工業における雇用拡大の繰返しをもたらし¹⁸ない」ことである。例えば「メキシコの工業發展は、せいぜい工業部門での雇用の継続的成長を伴わない工業の継続的成長を意味するものでしかない」¹⁹。第3は、その工業化が国際的レベルでは《従属的》工業化でしかないこと、換言すれば、「工業植民地」への移行として特徴づけられる点である。それは「第三世界経済に帝国主義的に導入された破片」²⁰である。また「多国籍企業の保護の下で工業生産に伴ういくつかの工程が断片的に配置された。各々の『工業化しつつある』植民地あるいは半植民地は、工業プロセスの一部を——決して全部ではなく——分担している。ウェーレンが『工業化』と婉曲に言及したものの多くはたいていは『部品ブランド』活動の発展であった。それゆえ帝国主義的中枢と資本主義的工業化を等しいものと仮定することはかなり異なった階級構造と同様に、産業構造と生産諸力の発展の水準の本質的差異を見のがすことである」²¹ (傍点筆者)。このようにしていずれにせよ「自立的工業化の神話」は否定される。「今日の第三世界における資本主義的發展は少数の国における人口の少数部分の利益のた

15 *Ibid.*

16 A. エマヌエルとは異なり1人当たり GNP は必ずしも適切な指標ではないとしながら例えば次のように指摘している。「第三世界からの帝国主義諸国の企業による製造品輸出が経済の發展すなわち人民大衆に対してどんな重大な効果を及ぼしたという証拠は存在しない」(P. McMichael, et al., *op. cit.*, p. 90)。

17 *Ibid.*, p. 99. 表面的な工業化の進展も、「特に GDP に対して工業部門の占める比率の増大は、部分的には第三世界における非製造業部門の低生産性によって説明される」(p. 89)。

18 *Ibid.*, p. 101. (この点はすでにみたB. サトクリフの「プロレタリアート不在」の成長論と同一である)。

19 *Ibid.*, p. 103.

20 *Ibid.*, p. 84.

21 *Ibid.*, p. 86.

めの従属的成長を意味する」²²のである。

以上のような第三世界における「工業化」の諸特徴、その否定的現実をトータルに理論的に位置づける枠組みを提供したのが、理想的アプローチと結びついたフランク的帝国主義論であったといえよう。A. エマヌエルにおいてはそれは以下のような叙述として現われている。「先進諸国はそこで形成される新しい資本のすべてを現在では——困難なしに——吸収するに十分豊かである。ごく少数の輸入代替産業を別とすれば、低開発諸国はこの同じ資本に魅力的な投資見通しを与えるには余りにも貧しい」²³。また「ここにおいてはもはや抽象的な概念のレトリック——剰余価値、資本、利潤など——の問題ではない。物質的消費の問題である。……今日あるいは予想される将来において客観的な自然的技術的諸条件の下では、富める国の国民は他の国民がほとんどあるいは全く消費しないことによってのみ、それと結びついてあらゆるものを消費しうる。二つのグループ諸国の労働者階級の間の連帯を破壊しているのはこれである」²⁴。このようにして「ウォーレンの強調するように帝国主義は自己破壊的ではない。それは自己再生産的である」²⁵、と結論づけられるのである。同様に P. マクミハエルらも次のように論じている。「我々は第三世界における自立化工業化をみないであろう。むしろ増大する貿易ギャップに反映された増大する従属をみるであろう」²⁶。帝国主義的中枢と第三世界の不平等は継続しているのであり、第三世界における「工業化」の発展、すなわち「この（従属的——引用者）成長は、帝国主義の過去・現在・未来の文脈におかれた場合にのみ理解されうる」²⁷、と。

以上のような従属派による第三世界の資本主義的発展 = 「工業化」に対する評価は、何よりもまずその「工業化」の否定的現実を浮彫りにしている点で積極的意義を有していることは疑い得ない。また現代世界経済の帝国主義的性格を告発する点できわめて鋭いものがある。けだし広義の帝国主義論に基づき世界資本主義との関連で、第三世界の資本主義的発展の「特殊性」を明らかにしようとする視角は重要であろう。そのかぎりでは、グローバル・システムというよりむしろ異なった諸国民経済の集

22 *Ibid.*, p. 105.

23 A. Emanuel, *op. cit.*, p. 77.

24 *Ibid.*, p. 79.

25 *Ibid.*, p. 77.

26 P. McMichael et al, *op. cit.*, p. 102.

27 *Ibid.*, p. 104.

合体として世界経済をとらえているとの以下のようなウォーレン批判は妥当であろう。すなわち、「彼は不運にも世界資本主義が北アメリカ、西ヨーロッパ、日本の帝国主義的中枢からさまざまな(金融的、亜帝国主義的、軍事的、商業的)センターを通じて操作される国際的な経済的複合体であるという可能性を考慮していない」²⁸。

しかし、その反面で彼らのアプローチによる最大の難点は、第三世界の資本主義的「発展」が袋小路にあることが容易に結論されることである。しかし、そもそも《資本主義的》発展の目的は人間の物質的福祉の改善ではあり得ない以上、こうした結論はむしろ自明——理念的アプローチを前提とする以上——であるといわねばならない。従属派の「工業化」に対する評価においては、資本主義的「発展」のもたらす諸矛盾の「普遍性」と「特殊性」が混同され区別されていない、あるいは区別をするような視角が確立されていないのである。むしろその否定的現実、特殊性のいっさいが不変の《中枢＝衛星》構造を持つ世界資本主義(＝帝国主義)にだけ起因するものとされかねない点で問題である。また第三世界の「工業化」の進展も、工業化しつつある植民地あるいは半植民地との評価にみられるように、実際「再版植民地経済」の主張にはかならない。それは帝国主義の強化にはかならないのであり、第三世界の「発展」のダイナミズムが無視、あるいは少なくとも軽視されている点で一面的であるといわねばならないであろう。要するに理念的アプローチと広義の帝国主義概念が結びつくことにより、第三世界における資本主義化の現実の発展、その普遍性と特殊性を明らかにする上で難点がみられ、その特殊性は連続的な性格を持つものとしてのみ理解される傾向が濃厚なのである。

(2) B. ウォーレンらの評価

以上のような従属派の見解に対して、B. ウォーレンの主張は全く対照的でありその結論は正反対である。彼の論文「帝国主義と資本主義的工業化」の眼目は、なによりも第二次大戦後に生じた「変化の要素」「新しいダイナミックな要素」に焦点をす

28 *Ibid.*, pp. 93~94. また彼のデータの評価の方法が「構造的全体、すなわち国際資本主義経済の一要素だけを独立して考察するバラバラの fragmented アプローチであると指摘されている」(p. 83)。

29 A. Emanuel, *op. cit.*, p. 71,

30 この点は世界経済の“ダイナミズム”を強調される木下悦二氏の適切な批判が参照されるべきである。(木下悦二, 『現代資本主義の世界体制』, 岩波書店, 1981年, 197-198ページ)。

え、第三世界の「発展の側面」「資本主義的工業化の現実とその意義」を検討することにある。彼は「事実としての発展」をとりあげる立場から、従属派のアプローチを批判している。理念的な「発展」像を資本主義的工業化の裁断基準としている点を問題にしているかぎりでは彼の批判はごく適切なものと思われる。「大衆の心要性を満足する過程³¹」としての発展ではなく、「資本の継続的な再生産のための適切な経済的、社会的、政治的諸条件を提供する³²」ものとしての資本主義的発展の成功こそが問題として提起されねばならない。このような視角から B.ウォーレンは従属派の主張を「道徳的批判」として位置づけて以下のように論じている³³。「このアプローチと共に残念ながらも生じているのは次のことである。明示的にせよ暗示的にせよ、いっさいの階級的含意を欠如した『自立的経済発展』（時々社会主義という言葉が忍びこんでいるけれども）という勇敢な旗印の下でいくぶんユートピア的な理念が進展している。明らかに低開発諸国の現実の資本主義的発展はこの理念（完全雇用、多様な産業と農業、適切な住宅、比較的公平な所得分配、その他）とは一致しえない。こうして社会主義だけが解決をもたらすと手ぎわよく結論される。この過程において現実の発展は何かという問題や、発展しつつある資本主義にとってそれがいかに伝導的 conductive であるかといった問題が無視される」。第三世界の資本主義的工業化が理念化された要求を満たしえないゆえに、直ちに失敗とみなされる点を批判しているのである。

次に B.ウォーレンによる第三世界の「工業化」の現実に対する評価を検討しよう。彼は第二次大戦後の新しい諸条件（政治的独立及び客観的諸条件——特に東西対立と1970年代における帝国主義的対立の新しい局面）の下での、第三世界の《自立的》工業化の進展を強調している³⁴。すなわち、B.サトクリフの提起した自立的工業化のた

31 B. Warren, *op. cit.*, p. 4.

32 *Ibid.* A. ブレナーも彼を支持して次のように論じている。「資本主義的発展が実際には除外されるような形で社会主義者（従属派のこと—筆者）は、発展を暗黙のうちに定義してきたウォーレンは強く主張している。もし発展が『大衆の必要』に言及することによって定義されるならば、その時にはマルクス主義者は、資本主義的発展がその計算書に適合しようとの議論を受入れるとは考えられない。しかし、このことは継続的な停滞と資本主義的な次元で成功しており、資本の継続的な再生産のための諸条件を創出している発展を区別することを不可能なままにする。この点でウォーレンは全く正しいと私には思われる」（A. Brewer, *op. cit.*, p. 291）。

33 *Ibid.*, p. 16.

34 *Ibid.*, pp. 33-34. ただ B.ウォーレンの主張の眼目は必ずしもこうした《自立的》工業化の強調だけにあるのではない。彼はサトクリフの4つの指標は歴史的

めの四つの指標は「まさしく達成される途上にある」。具体的には第三世界の工業的発展のかなりは国内市場に基づいて行なわれているし、製造業部門の多様化は戦略的な資本財、中間財ですでに達成されている。また海外直接投資は増加したが、それは低開発諸国の統制下にあり、その工業化をむしろ補充するものである。さらに技術的発展も初期的段階ではあるが確かに停滞してはいない。技術的後進性と従属を除去する客観的条件は急速に拡大している。

《自立的》工業化を強調する以上のような B. ウォーレンの見解が、余りにも楽観的であり工業化の現実を過大に評価するものであることは疑い得ないであろう。この点では比較的彼に近い立場にある A. プレワーも「私のウォーレンに対する主な批判は工業発展が第三世界全体にあまねく広がっていると一般的に論じることを急ぎすぎている点である³⁵」と指摘しているほどである。また彼の議論には、一般的に言って第三世界における資本主義的発展の「特殊性」を明らかにする視角が欠如していることが大きな難点である。この点では従属派の議論とは全く逆の意味で一面的である。とはいえ、第二次大戦後の新しい世界経済的諸条件の下における、第三世界の発展の側面、新しいダイナミックな要素に着目している点は、従来「停滞論的」論調が多かっただけに十分評価されねばならないところであろう。

なおこの点では従属派を「自前の資本主義」と「持ちこまれた資本主義」を区別しないとして批判されている木下悦二氏が、第三世界の「発展の成果」を手ぎわよく整理されているので、それを紹介しておこう。³⁶ まず第1に経済成長率は、全体としての低開発国のそれは開発国のそれを上廻っている。そして発展の条件はより多くの国に拡がりつつある。第2に工業化の成果として、工業部門の成長率は開発国を上廻っている。そして多くの国で国民総生産に占める工業部門の比重は大きくなり、この部門の労働人口も増加している。第3に、一次産品輸出が依然として大きい。この面でも徐々にではあるが加工度の高い輸出への努力が実りつつある。第4に、農業生産の発展の成果も小さくない。例えば食糧生産についていえば1960年代の西アジア、1970

にみれば「必要かつ十分な条件」ではないとして、例えば日本の初期の工業化において製造品輸出が決定的役割を演じ、また借入物の技術に大いに依存したことなどをあげながら、この概念自体のあいまいさを指摘している。その意味で《自立的》であるか否かを越えて資本主義的発展としての第三世界と先進諸国との共通性を第二次大戦後の新しい問題として重視しているのである (pp. 34-35)。

35 A. Brewer, *op. cit.*, p. 293.

36 木下悦二、『前掲書』, 167～171ページ。

年代のアフリカは停滞が顕著であるが、全体として開発国の成長率を上廻っている。このように経済発展の成果を第三世界のダイナミズムの発現として重視される木下悦二氏もむしろその否定的現実を無視されているわけではない。「低開発国が直面している困難は次第に解消されているとはいえない³⁷」。また「植民地制度の崩壊と資本主義的発展が低開発国の大衆的貧困、飢餓、収奪を解消しなかったばかりでなく、金融的従属や外国資本の拡大さえひきおこしている³⁸」と指摘されている。(問題はこうした困難の性格をどのようなものとして把握し理解するかである。この点は節を新たためて詳細に検討することになる。)

このように第三世界の資本主義的発展を強調する B. ウォーレンは現代帝国主義の役割・機能をどのようにみているであろうか。ここでも彼の主張は、従属派の見解とはきわめて対照的である。「第三世界に対する帝国主義諸国の政策と総体的インパクトは第三世界の工業化に現実にも有利である⁴⁰」。また「政治的支配の時期に機能していた資本主義的工業化を阻害する諸要素は比較的短命であり、戦後は資本主義的工業化を導びく帝国主義のこれらの諸要素が完全に再現していると今やみなすことができ⁴¹る」。このように現代帝国主義の積極的機能だけを強調するならば、やはり一面的であるとの批判は免れないであろう。だが彼の議論はこのように単純に整理しえないものを含んでいるように思われる。つまり彼にあっては第二次大戦後の新しい条件下で

37 同上, 171ページ。

38 同上, 198ページ。

39 例えば, B. サトクリフは新植民地主義政策を低開発諸国の工業化を阻止するための意図的な政策とみなしていた。また P. マクミハエルらも明示的にはないが否定的なものとして位置づけているものと思われる。積極的に工業化を促進しようとしてもそれは工業植民地化でしかない。

40 B. Warren, *op. cit.*, p. 3.

41 *Ibid.*, 42. (この箇所にはウォーレンは次のような注をつけている。「混乱を避けるために、以下のことが指摘されねばならない。帝国主義の『歴史的使命』は、資本主義体制を拡張し、世界全体の生産力を拡張することであるが、その初期における不平等の体制(そこで不平等の要素は変化していったが)の創出は、しばしば特定の時期における経済的進歩に対する歴史的障害物を生み出してきた。」ところが、後の著書『帝国主義: 資本主義のバイオニア』の中では、従属派による「道徳的批難」に対抗するためか、この帝国主義の「歴史的使命」に力点がおかれ、「近代化論」的論調が支配的であることに注意しておこう。特にその第二部は「第三世界資本主義の勃興と帝国主義の積極的役割」と題され、先進資本主義(=帝国主義)の果たす役割は一貫して積極的なものとされている。また物質的福祉の改善も進展するものとしている。)

の「力のバランス」の変化を重視した帝国主義の後退が前提だからである。こうして P. マクミハエルらも次のように彼の議論を批判しているのである。第三世界における工業化の急速な進展が「帝国主義的中枢とは独立したもののなか、あるいは帝国主義的支配のゆえなのか、それとも帝国主義的支配にもかかわらず⁴²」あいまいであり混在している、と。しかし、「こうした批判は必ずしも的確なものとはいえない。なぜなら、ここで指摘された「あいまいさ」、換言すれば一義的に規定しえないという事実は、むしろ複雑かつ多様な現代帝国主義の諸機能と役割とを、従ってまた世界資本主義の新しい様相を反映するものとも評価されるからである⁴³。それは、いわば本格的な工業化のための“前提条件”としての政治的独立等の新しい世界経済的条件の存在を視野にいれたものである。少なくともここでは古典的帝国主義期と第二次大戦後の現代とを区別する視角は明確であり、新しい特徴を鮮明にすることに彼の眼目がある。その限りでは母国の原料基地化等によるモノカルチャー的構造の強制とは異なる現代の世界資本主義の新しい一面を示唆するものと理解されるのである。

最後に B. ウォーレンのこの主張の最大の難点は、第三世界の工業化の急速な進展が「力のバランス」の変化及び広義の帝国主義概念と結びついて直ちに帝国主義崩壊⁴⁴論へと帰結することである。B. ウォーレンは言う。「力のバランスが少数の主要な⁴⁵

42 P. McMichael et al., *op. cit.*, p. 83.

43 例えば第三世界への多国籍企業の進出を考えてみよう。この多国籍企業の受入れ(このこと自体一定の工業化を前提とする)を、第三世界はきわめて不利な条件で行なわざるを得ない——それは一定の支配=従属関係を意味する。しかもまたそれは国内余剰の流出等の点で国内の工業化が阻害される一面を持つ。が同時にそれと結びつきつつ全体としての「工業化」の進展——歪められたものであるとはいえ——がみられるのが今日の実状であろう。

44 この点については、P. マクミハエルらは彼は帝国主義システムに固有の破壊の諸力を誤解し、帝国主義の「墓掘人」をナショナリズムと同一視していると批判している(P. McMichael et al., *op. cit.*, p. 84)。また A. ブレワーはウォーレンのデータは發展が非常に不均等であることを示しているとして「(ウォーレンが予想しているように)諸国間の不平等の単純なる緩和ではなくて不平等の体系(革命によって終結しないならばきわめて長く続くであろう)の内部における異なった諸地域の相対的地位のシフトがむしろ予想される」(A. Brewer, *op. cit.*, p. 293)と指摘している。

なお B. ウォーレンは後の著書においては植民地体制崩壊後における帝国主義とはそれ自体不条理であると断定している。例えば「実際、植民地主義の特に『非難に値いする』諸側面は、脱植民地主義期においては非論理的にも『帝国主義』(新植民地主義)に帰せられた。しかし、これは脱帝国主義における用語の不条理な継続的な使用によってのみ可能となってきたのである。」(B. Warren, *Imperialism: Pioneer of Capitalism*, 1980, British library, p. 126. 注(1))

45 B. Warren, *op. cit.*, p. 41.

帝国主義諸国の支配からより一層のパワーの均等な分散に移行してきた。(第三世界において)資本主義が成長すると共に帝国主義は後退している,「世界の非資本主義的領域への資本主義の拡大が帝国主義と呼ばれた不平等と搾取の国際システムを創造したならば,それは同時に非資本主義的領域における資本主義的社会関係及び生産諸力の拡張によってこのシステムの破壊の条件を創り出した」と。

従属派とは正反対のこうした結論は,一言でいって第三世界の資本主義的發展の過大評価と帝国主義理解の誤りによる。とりわけ金融資本を基軸とした世界経済の重層的編成という帝国主義の段階的把握の欠如にその基本的原因は求められるであろう。

3 第三世界が直面している諸問題の性格

最後に第三世界が直面している諸問題の性格について論じなければならない。この点を明らかにすることは“南北問題”の性格とその意義を,また帝国主義の現代的性格を解明することにつながるであろう。第三世界がさまざまな困難をかかえ,深刻な問題に直面していること自体には異論はないであろう。問題は,その困難の性格をどのようなものとして理解し評価するかである。第二次大戦後のとりわけ植民地体制崩壊後の現代においてそれは「新しい性格」を帯びているであろうか。それとも古典的帝国主義期,植民地体制期のそれと同様のものとみなすべきであろうか。

すでに示唆していたように従属派のような立論・視角によってはこうした諸困難の「新しい」性格は実際には提起されえない。なぜなら第三世界のダイナミズムが無視され,それは資本主義との接触の初発から「連続的」なものとして把握されるからである。いっさいの問題をフランク的帝国主義にのみ解消しようとする視角が基底にあるからである。⁴⁶

(1) 『資本論』第1版の序文の叙述に関して

まず初めに K. マルクスの『資本論』第1版の序文における有名な叙述をとりあ

46 P. マクミハエルらは第三世界において増大する現実のあるいは偽装された失業を「一層の新植民地主義的非惨」と特徴づける一方で「開発諸国と比較して低開発諸国が停滞的であることは全く明白である」(P. McMiheal et al., *op. cit.*, p. 99)と述べている。また第三世界からの製造品輸出の増加についても多国籍企業の役割のみを強調している。「輸出セクターの大部分が帝国主義諸国の企業の手にあるならば貿易の拡大と成長を第三世界諸国のダイナミズムの表現とはほとんどいえない」(p. 91), と。なお本稿5ページを参照。

げ、それとの関連でこの問題に接近を試みよう。この序文においてマルクスは先進的なイギリスに対してもっぱら後進的ドイツ（あるいは西ヨーロッパ）を念頭におきつつ、その直面する困難の性格をごく簡潔に三点ほど指摘している。まず第1は、資本主義的生産の自然法則から生ずる社会的な敵対的性質である。資本主義的發展に普遍的なものとしての「近代的窮迫」である。第2は、この「近代的窮迫」が後進国ではいっそう極端な形で現われることである。なぜならこれに対応するもの（例えば工場法）が欠けているからである。このような指摘は普遍的な「近代的窮迫」が後進資本主義においては一般により極端・特殊な形態をとって現われることを示唆していると考えられる点で重要であろう。第3は逆に資本主義的發展が欠如していることによる「古くさい旧式となった生産様式」の存続に基づく困難である。それは「一連の前代から受けついで窮迫」である。

さて、以上の諸点に関連していえば B. ウォーレンの主張の限目は、もっぱら第1の資本主義的發展のもたらす「近代的窮迫」(普遍的矛盾)を強調することにあるといえよう。第三世界における資本主義的社会関係と生産諸力の増大に注目する彼にとっては、その直面している深刻な諸問題——例えば農業の停滞、過度の都市化、増大する失業者など——は、まさしく第三世界に生じている「資本主義の大波の major upsurge」自体に起因するものなのである。それは国内諸矛盾に起因するものであり、現行の帝国主義的諸関係によるものではあり得ない。「資本主義的工業化が深刻な諸問題に直面していることは誰も疑い得ない。これらは今や低開発諸国の国内諸矛盾に根ざしている」。⁴⁸ また「これらの諸問題が帝国主義の歴史的遺産であると論じられるのは疑い得ないが、しかしこれらの諸問題を解決しようとする諸方も働いている。そしてどんな場合でも——遺産があろうとなかろうと——それらの問題の継続は、今や基本的には非敵対的である現在の帝国主義——周辺矛盾のせいにはできない」。⁵⁰

47 K. マルクス、『資本論』（岩波文庫第1分冊）14-15ページ。

48 この点は A. ブレーワーも彼を支持しつつより端的に次のように述べている。「大衆のこの『マージャーリゼーション』は多くの著者（従属派を意味する一筆者）によって強調されてきた。しかし、増大する『相対的過剰人口』をマルクスが実際に予想していたことに注目しなければならない。そして後進諸国は先進諸国よりもいっそうびったりとマルクスの資本蓄積モデルに適合すると言いうる」と (A. Brewer, *op. cit.*, pp. 288-289)。

49 B. Warren, *op. cit.*, p. 42. (なおこの点は「低開発」性認識の存在しない彼にあってはマルクスの指摘した第3の点を逆の面から指摘していると理解できるであろう。)

50 *Ibid.* <注(8)>

以上の B. ウォーレンの見解は、すでに示唆したように第三世界の資本主義的發展が、現代帝国主義体制によって刻印される「特徴(特殊性)」を持つ点を無視している点で、換言すればその直面している困難を資本主義發展の普遍的矛盾(及びその發展の欠如)にのみ解消している点で従属派とは全く逆の意味で一面的議論となっている。ただし彼の見解には第三世界の「工業化」が現代においては対内的にも対外的にも《社会主義に対抗するものとしての》資本主義化であるという「特殊性」をみる視角が事実上存在している点は十分注目されるべきであろう。《自立的》工業化概念のあいまいさを強調し第三世界における「反帝国主義闘争の再検討」を求める彼の以下のような叙述がそれである。「資本主義世界内における経済的相互依存の増大と社会主義と大衆に対する世界を通じての支配階級・搾取階級の協力は両方とも次の事を意味する。増大する相互依存関係の中で、以前の不平等な『パートナー』の間の一様性 equality という点から問題がより一層鋭く提起されるであろうことを」。

さてあらためてマルクスのあげた第三の困難、「一連の前代から受けついだ窮迫」の問題にもどらう。現代の第三世界が直面している諸問題、その困難に対してはほとんどこうした特徴づけはできない。むしろ同じ『資本論』の中でも後進国が原料基地に、農業国に転化することを叙述した箇所の方が今日的には興味深い。そしてむしろこうした問題を正面にすえて《中枢=衛星》構造を持つ世界資本主義のフレーム・ワークによって大胆に理論化したのは A. G. フランクである。彼によれば資本主義との接触の初発から第三世界は「開発」の対極にあるものとして「未開発」とは異なる「低開発」構造を強制された。しかも第二次大戦後においてもそれはさらに強化されてきたのである。すなわち「低開発の發展」である。マルクスが言及した「近代的窮迫」とも「前代から受けついだ窮迫」とも異質の「低開発」性が鮮明にされたのである。第三世界が直面している諸困難の「特殊性」——資本主義的「發展」とは根本的

51 *Ibid.*, p. 35.

52 例えば次のような叙述をあげておこう。「外国市場の手工業的生産物を破滅させることによって、機械経営は、外国市場を強制的に自己の原料の生産部面に変ずる。かくして東インドは、大ブリテンのための綿花、羊毛、黄麻、藍等々の生産を強制された。大工業の諸国における労働者のたえざる『過剰化』は、諸外国への移住と植民とを温室的に促進し、これらの外国はたとえばオーストラリアが羊の生産地となったように、母国の原料の栽植地に変ぜられる。機械経営の主要所在地に対応する新たな国際分業が創出されて、それは地球の一部を、工業を主とする生産地域と他の部分のための農業を主とする生産地域に転化させる」(K. マルクス、『前掲書』(岩波文庫第2分冊)453ページ)。

に異なる——の重要な一面が明確にされたのである。ただし、この「低開発」構造は「伝来的」構造をすべて破壊したり、自生的な変化と発展の契機を全く否定するものとみなされるべきではない。

しかし、この「低開発」構造が広義の帝国主義概念の下で資本主義の世界的発展に歴史貫通的なものとして把握されたことによって、大きな問題が残ることになった。すなわち、一方ではこの「低開発」概念がいつそうあいまいにならざるを得ないことである。つまりこの概念が社会経済的内容によって規定されえないごく一般的・抽象的なもの——例えば世界資本主義によって第三世界に刻印された否定的現実や従属性といった——にならざるをえないことである。他方では、古典的帝国主義期と現代とを対比して第三世界が直面している困難の「新しい性格」を問うという視角が欠如することになる点である。その特殊性は「低開発」に集約され、「低開発」として連続しているのとらえられるからである。別言すればこうである。従属派においては「低開発」構造（あるいは《中核＝衛星》構造をもつ世界資本主義）が「原理」の位置にすえられ、それによって第三世界の「工業化」＝資本主義的「発展」の性格、その特殊性が規定されるという立論がされているのである。我々は逆に現代の第三世界においてはその国家主導型の「工業化」＝資本主義的發展を「原理」の位置にすえ直し、その「発展」がいかに現在の世界経済的諸条件によって規定され、また帝国主義の歴史的遺産としての「低開発」構造（さしあたりモノカルチャー的生産構造を主な内容とするものとして限定しておこう）をいかに変容するかをその現実に迫る基本的視角としなければならない。ただしその資本主義的發展はただちにこのような「低開発」構造の急激かつ全面的な崩壊を必ずしも意味しない。長期的には崩壊の傾向をもつとしても——資本主義的發展の普遍性＝法則性はそれを不可避とする——場合によって一時的にはその再編・維持強化さえ現象しうることを否定するものではない⁵³。しかしそれを現代の「中核－周辺関係」にのみ起因させてはならないのである。こうした視角から第三世界の「工業化」の諸特徴、その特殊性が、資本主義的發展という普遍性を見失うことなく明らかにされねばならないと考えているのである。

(2) 木下悦二氏の見解

最後に、第三世界の直面している諸困難の性格は何かという問題を正面からとりあ

53 例えば「緑の革命」に関連した木下悦二氏の議論を参照のこと（木下悦二、『前掲書』、178-180ページ）。

ば、従属派を批判されている木下悦二氏のきわめて興味深い議論を検討しよう。

木下氏は第三世界が直面している諸困難の性格は「姿形」は類似しているとしても、植民地制度下で悩まされていたそれとは「質的に異なる」ことを強調されて次のように論じられている。「ここで論じたジレンマはいずれも低開発諸国が『自立的』国民経済形成の過程で半ば必然的に遭遇する諸困難でそれはいずれも過去に陥っていた困難と形は同じであるがそのために両者を同一視すれば、低開発諸国が当面している問題の真の性格を見誤るように思われる⁵⁴」と。新従属派に欠けているのはまさにこの視角であるとしてさらに次のように主張されている。「新従属派の見解を力づけているのは、実はさきにもみたような低開発国が今日直面している諸困難であろう。植民地制度の崩壊と資本主義的發展が低開発国の大衆の貧困、飢餓、収奪を解消しなかったばかりでなく、金融的従属や外国資本の浸透の拡大さえひきおこしている。つまり『自立的』国民経済形成のための経済建設の過程で、もともとその克服を目指して出発した事態がかえって悪化するという、低開発国にはほとんどさけられないジレンマにかかわりがある。たとえ社会主義的發展の途を選んでもこのジレンマは姿を変えて現われる性格のものである。……このジレンマが低開発国の高度資本主義国への従属強化へのテコとして働く可能性も、また先進国がこれを介して帝国主義的支配の再編を図ろうとしている事実……も否定するものではない。……それにもかかわらず植民地制度の崩壊をひきおこした国際環境の下で、このジレンマを『自立化』へのプロロスとして克服してゆく方向に進みうる可能性をみなければならないと考えている。つまり、低開発国の資本主義的工業化を直ちに再版植民地経済とみることに反対している⁵⁵」。

我々もすでにみたように今日の第三世界の「工業化」の現実と「再版植民地経済」とみることに反対する氏の見解に基本的に賛成である。ただそこでは第三世界の直面

54 木下悦二、『前掲書』、176ページ。なお現代のジレンマとされているのは具体的には以下の四点である。第1は社会的剰余を越える「過度投資」を伴う工業化の過程における構造的な国際収支赤字の問題である。これに対処するために一次産品の増産を迫られ、その輸出拡大の成否は先進国の需要に依存せざるを得ないことである。第2は、同様に構造的な国際収支赤字に対処するために、結局は先進国の資金援助に依存せざるを得ず金融的依存を強めるというジレンマである。第3は資本不足というよりむしろ特に技術移転のために直接投資を誘引せざるを得ないことである。外国資本の支配から脱け出るための工業化の過程で外国資本に依存せざるを得ないのである。第4は、農業生産力の発展により貨幣経済の浸透と自給的農村共同体の解体が進行し都市スラムが形成されることである。貧困の克服をめざす過程で新しい貧困が創出される (174-176ページ)。

55 同上、198ページ。

している諸困難の「新しい性格」はなお不明確であるように思われる。木下氏はその困難を「自立的」国民経済形成の過程で「半ば必然的」なものとなされ、社会主義的発展の途を通っても現われることを強調されている。こうしたとらえ方ではその困難は、結局主として古典的帝国主義的段階に形成・完成された歴史的遺産としての「低開発」構造に帰着することになるのではなかろうか。第三世界が直面している困難としては、現時点ではこうした社会経済的体制にかかわらない「低開発」構造が最大かもしれないし、その重要性は明白である。しかし、ここに重点がおかれるならば木下氏の主張は「新しい性格」の強調にもかかわらず、内容的には次のように理解されるように思える。すなわち、第三世界が直面している諸困難の性格は以前と「同質」であるが、レーンの時代とは異なり資本主義的発展の途であっても今日では「自立」の可能性が開けている。従ってその困難は「新しい次元」にある、と。我々は「新しい次元」にあるだけでなく、第三世界が直面している（あるいは直面しつつある）困難が、すでにその資本主義的発展そのものから生み出される諸矛盾、諸問題に帰因する点を強調したいと考えている。⁵⁶そここそ現代における「新しい性格」がある。むしろその諸矛盾はすでに指摘したように「低開発」構造によって制約され、現代帝国主義によっても規定されることからきわめて特異な様相を示すものであるが、同時にこのことは分極化の著しい第三世界全体に直ちに一般化はしないであろうが、一つの歴史的傾向として位置づけられよう。第三世界の分極化と同時にその分極化を貫ぬく

56 ただし社会経済体制の相違に関連する次のような指摘もあることは事実である。

「国民生産力の低さからくる社会的剰余の絶対的規模の乏しさは致し方ないとしても、生産関係的制約に対しては社会的改革を介して国内建設への動員可能な社会的剰余に転化させようとする努力が行なわれることになる。外国資本のナショナリゼーションや、農地改革などの社会改革を通じての寄生層の排除がそれであるが、しかし、社会革命をつうじて社会的剰余のすべてを建設に振りむけようとする社会主義型発展を迫る国を別にとすると、いずれも不徹底に終わっている」と(同上、173-174ページ)。

57 木下悦二氏はこの点を余り重視されていないように思えるが、それはおそらく第三世界に対する一従属派とは異なった意味ではあるが一理念的アプローチが存在していることによるものと思われる。例えば第三世界の直面しているジレンマについての次のような叙述がある。「これは資本主義の本源的蓄積期に共通する現象といってしまうはそれまでだが、貧困の克服をめぐり経済建設の過程で新しい貧困を創出するというジレンマに遭遇するのである」(同上、176ページ)。またこのことから後述するように第三世界の民族ブルジョアジーの「進歩的性格」だけが強調されている。他面ではその原因は、従属派に反対する論争的な立場から問題をとりあげられるとともに、すでにみたその帝国主義認識に関わるものである。

「発展」の傾向を重視し、いわゆる「中進国化」、「NICS化」現象を「例外」としてではなく一つの歴史的傾向と考えているのである。

むすびにかえて

第三世界の「工業化」をめぐる、帝国主義概念、「工業化」の評価（及びそれと「帝国主義」との関連）、それが直面している諸問題の性格について B. サトクリフら従属派の見解とそれを批判する B. ウォーレン及び木下悦二氏の見解を検討してきた。新たためて《従属的》工業化に反対しながらきわめて対照的な両者の主張をとりあげ、また我々の基本的視角を整理して本稿のむすびにかえたい。

まず木下悦二氏の第三世界の資本主義的發展に対する基本的評価は一言でいって、《帝国主義に対抗するものとしての》工業化と特徴づけられるであろう。氏によれば低開発諸国（一部の社会主義諸国を含む）が共通して直面している民族的課題は「自立的」国民経済の形成であり、「これらの国々の全運動を動かしている原動力はナショナリズムではあるが」⁵⁸すでに問題は、政治的独立ではなく経済的従属からの脱却であり、「低開発世界の現状勢を植民的隷属か政治的独立かの次元で把えるのではなく、すべてが自立に向っているのであって、いかなる自立が問われているとみなしてよいと考える。いうまでもなく多様な自立がありうるが、大きく括って資本主義的發展か社会主義的發展かに分けられよう。この二つの發展の可能性、あるいは二つの途をめぐる闘いに低開発国問題の現段階の特徴があるのである」⁵⁹。こうして両体制の共存の下で「世界的反帝国主義運動の成果をわが手に握りしめようとしているのは、低開発国の民族ブルジョアジーであると表現してよい」⁶⁰と現段階における民族ブルジョアジーの進歩的性格を強調されている。「開発の成果」を重視される氏の議論は、こうした結論への伏線であったといえよう。

他方、すでに触れておいたように、第三世界における「反帝国主義闘争の再検討」に窮極の問題関心を有する B. ウォーレンは次のように論じている。「進歩的な民族ブルジョアジーというあいまいな構図のかわりに、我々は国内的には反動的で国際的

58 同上、195ページ。

59 同上

60 同上、197ページ。

には帝国主義と結びついた特権グループのブルジョアジーというより一層現実的な構図に従うべきである、とレッダが概括的に主張するのは正しい。しかし、我々はレッダとは異なり次のように主張する。反動的な国内政策と帝国主義との結びつきは資本主義的経済発展という文脈の内部での特定のナショナル・インタレストに対応する自主的な選択と完全に合致する。もしそうでなければ資本主義は第三世界内部で長く生き続けることはできないであろう⁶¹。このように資本主義的発展と共に「反動的な国内政策と帝国主義の結びつき」を重視する彼の「工業化」に対する基本的評価は、《社会主義に対抗するものとしての》資本主義化と特徴づけられよう。

同じく《従属的》工業化論に反対しながら《帝国主義に対抗するものとしての》工業化と《社会主義に対抗するものとしての》資本主義化と特徴づけられる両者の基本的評価・視角の相違をどのように考えるべきであろうか。1964年の第1回国連貿易開発会議 (UNCTAD) の開催から資源ナショナリズムの高揚、更には新国際経済秩序 (NIEO) の要求という流れ、⁶² その下での主要な低開発国の「工業化」の進展は、帝国主義に対する第三世界の政治的独立から経済的「自立」(「自立的」国民経済形成)への動きとしていわば歴史的に連続的に把握されるべき性格のものである。そしてなお大部分の諸国がモノカルチャー的《低開発》構造の下にあり、古い農工型国際分業が存続しているかぎりその歴史的意義は重要であろう。こうした意味においては木下氏の視角は有効であると思われる。⁶² しかし、同時に B. ウォーレンが論じているように第三世界の「工業化」の進展は、本質的にはブルジョアの利害としての「一様性」という傾向をもたらすものであり、第三世界内部における階級的諸矛盾の一層の本質的重要性を意味するものであろう(ただしウォーレンは何ら具体的分析は行なっていない)。第三世界が直面している諸問題、諸困難の「新しい性格」は基本的にはこうした視角からとらえられるべきであろう。そこからまた現代世界資本主義の新しい様相・特徴が把握されることになるのであろう。「自立的」国民経済の形成か否かを越えたところにすでに問題が生じているとみなければならぬ。むしろ彼の見解には、すでに指摘したような第三世界の資本主義的発展の過大評価があり、それゆえまた帝国主義崩壊論の誤りがある。換言すれば現代帝国主義諸国と第三世界との間にある隔絶した生産

61. B. Warren, *op. cit.*, p. 43.

62. ただし木下氏のように NIEO における「対立」を市場メカニズムとそれを修正しようとする側の「原理の対立」とすることは疑問である。

力格差——第三世界の「工業化」の進展にもかかわらず総体として拡大している（いわゆる“南北問題”の深化）——の下での現代的な「支配＝従属」関係及びブルジョア的にせよ両者の利害対立を無視・軽視している点で一面的である。しかし、第三世界の「工業化」が資本主義的發展の途を歩むかぎり両者の関係は、古典的帝国主義期とは異なり今後ますます〈狹隘な〉ブルジョアの利害の対立に変質する傾向を強めるであろう。それは帝国主義的世界経済体制の全面的崩壊をもたらすものではなく、したがって世界資本主義のより一層の高度化、金融資本を基軸とした世界経済の重層的構造の再編成につながるほかないであろう。ただし、それはフランク的な〈中枢＝衛星〉構造の強化や単純な支配＝従属の本質不変・形態変化論ではない。その再編成において支配＝従属関係の内容の変化を重視し、それが現われる“場”である世界経済の質的・構造的な変化を問題にするものだからである。例えばその変化は、こうした支配＝従属関係（主として生産力格差に基づく商品経済的強制として現われる）の下での第三世界の「債務累積問題」が「国際金融危機」すなわち現代帝国主義体制の危機として発現せざるを得ない世界経済の「相互依存関係の深化」において示されているといえよう。またその再編成を迫る主体・推進力としての第三世界を射程におくものだからである。この推進力は表面的・直接的にはブルジョアの利害であるとしても、その深部の力は資本主義的工業化によってもたらされた（つつある）深化する国内諸矛盾であろう。

A. ブレワーは「論争の中心の問題はこの種の工業化が中枢と周辺の間で従属諸関係を新しい形態で再生産するだけなのか（アミン、フランク、その他が論じている）、あるいはそれは中枢一周辺の分割 division の崩壊の初まりをしるすものであるのか（ウォーレンが論じているように）という点にある⁶³」、と従属派とそれに反対する B. ウォーレンの論争を整理しているが、このような整理のしかた自体に難点がある。すなわち、第三世界の「工業化」の現実には、フランク的な帝国主義論を前提とした「従属的」発展ではありえない（いわんや「低開発の発展」ではありえない）。それは「再版植民地経済」（「工業植民地」）を意味しないという点において「自立的」工業化である。そのダイナミズムは重視されるべきである、が同時に帝国主義崩壊論に立つウォーレン的「自立的」発展ではありえない。金融資本を基軸とした現代世界経済の重層的構造が確かに新しい内容の一定の支配＝従属関係をほとんど不可避的に含む以

63 A. Brewer, *op. cit.*, p. 288.

上、第三世界の「工業化」もそのかぎりでは「従属的」発展と特徴づけられるからである。問題は第三世界の「工業化」の特殊性を、また世界資本主義の新しいあり方、様相をより深く究明することであろう。従属派への批判はその限りにおいて積極的意義を有するであろう。

最後に現代の第三世界の「工業化」を評価する我々の基本的視角をごく簡単にまとめておこう。

何よりもまず我々はフランク的な「低開発」構造ではなく第三世界における資本主義的發展＝「工業化」を「原理」の位置にすえ直し、その発展がもたらす諸困難を、現代の第三世界が直面している「新しい」性格として重要視する。それは資本主義的發展の普遍性＝法則性に基づくものである。そしてその発展の特殊性については、以下の4点に注目する。第1は、後発資本主義化であることによる特殊性である。それは国家主導型であると共にまた資本主義的發展のもたらす普遍的諸矛盾に対抗するものが欠如していることによる諸問題である。それはいわば後発資本主義に一般的な特殊性である。第2は、帝国主義の歴史的遺産としてのモノカルチャー構造（「低開発」構造をさしあたりこのように限定しておこう）に制約されることから現われる特殊性である。第3は、対内的にも対外的にも《社会主義に対抗するものとしての》資本主義的工業化としての性格がもたらす特殊性である（《帝国主義に対抗するものとしての》工業化はおそらく次第にその歴史的意義を失うことになろう）。第4は、帝国主義の現段階によって刻印される特殊性である。もちろん以上の諸点は別個に存在するわけではなく相互に関連しあって発現するものである。

《従属的》工業化、《社会主義に対抗するものとしての》資本主義化、《帝国主義に対抗するものとしての》工業化という冬々の特徴づけは、確かに複雑・多様な第三世界の現実の諸側面を反映するものであろう。我々の基本的視角は、第三世界内部における分極化を直視しながら全体としての「発展」（「開発成果」だけではなくそれが生み出す諸問題・困難を含めて）の論理を重視しつつ、なおかつ帝国主義の段階論的把握に立とうとするものである。